保健福祉委員会
オープン委員会開催記録（概要）

【日　　時】　令和８年２月 17 日（火）　午後１時 30 分から午後３時 30 分まで

【参 加 者】　土橋　勇司　委員長
鳥羽　　恵　副委員長
堀川　友良　委員　　池田めぐみ　委員　　都築　龍太　委員
佐藤征治郎　委員　　斉藤　健一　委員　　高子　　景　委員
渋谷　佳孝　委員　　三神　尊志　委員　　上三信　彰　委員
谷中　信人　副議長
（執行部）福祉局長　　福祉局理事　　障害福祉部長　　障害福祉課長
障害政策課長

【場　　所】　さいたま市役所　議会棟　３階　全員協議会室

【テ ー マ】　福祉的観点から見た情報コミュニケーション
【講　　師】　国立情報学研究所　准教授　坊農　真弓　氏
株式会社アイシン　ＹＹＳｙｓｔｅｍ事業推進グループ長
保坂　龍彦　氏
【内　　容】
開会後、土橋勇司委員長及び谷中信人副議長からの挨拶の後、講師からそれぞれ講演を聴き、意見交換を行う。
講演内容と主な意見交換は以下のとおり。

（１）講演内容「日本における手話言語コミュニケーションの現状」
講演では、まず、国立情報学研究所の坊農真弓准教授から、手話は身振りやジェスチャーではなく、独立した言語であり、科学的にも言語として認められている。また、日本のろう者は、手話だけでなく、日本語の書き言葉や口の動きも併用する、非常に高度なバイリンガル環境で生活してきたという実態について説明があった。
さらに、日本では約60年間、学校教育の場で手話が事実上禁止されてきた歴史があり、それが現在の手話の多様性や個人差にも影響を与えていることを紹介。
一方で、ろう者同士は会話の中で柔軟に表現をすり合わせ、円滑に意思疎通を図っている様子も具体例とともに示された。
加えて、ＡＩ技術を活用した字幕表示や手話支援システムの可能性についても触れられ、技術だけに頼るのではなく、ろう者の文化や言語を正しく理解し、共に社会をつくる

姿勢が重要であることが強調され、今回のオープン委員会を通じて、真の情報保障とは何かを考え、今後の政策につなげていく意義を改めて共有した。

（２）主な意見交換

〔池田めぐみ委員〕

手話ＡＩに必要な膨大なデータをどのように集めて入れ込んでいるのか。

〔坊農真弓氏〕

ＡＩはデータが命だが、現状では、手話に関する大規模データは圧倒的に不足している。ろう者や手話使用者が日常的にＳＮＳ等で手話を発信することが結果としてＡＩの学習を助け、精度向上や生活改善につながるのではないかと考えるため、ぜひ活動してほしい。

〔三神尊志委員〕

今後の議会における情報保障の進め方や優先順位についてどのように取り組んでいけばよいかアドバイスをいただきたい。

〔坊農真弓氏〕

多様な障害特性に配慮しつつ誰にとって何がちょうどよいか、それぞれ異なるので、優しさをもって、トライ＆エラーでやってみるしかないと思う。まずは、今回のような会議で情報を受け取る人たちが見やすいよう、前方の席に座れるようにする等、「今すぐできる配慮」から始めることも大事かと思う。

〔傍聴者〕

ＡＩが手話に込められた感情や文脈まで再現できるのか疑問がある。ＡＩによって、ＡＩがあれば良いというふうになってしまうことを危惧しており、ＡＩの使いどころは考えないといけないのではないかと感じている。

〔坊農真弓氏〕

ＡＩの手話への認識レベルはまだ低く、感情や文脈の判断は難しい。ろう者の皆様のご協力の下、知識をいただきながら、システムの構築を行っていきたいと思っている。

〔傍聴者〕

自分の場合は難聴であり、話すことができるので、受付等でも言葉で返されてしまい、聞こえの度合いが相手方に伝わらず、コミュニケーションがうまくいかないこともある。感情が先に入ってしまっての対応となるので、そういう場面ではＡＩによる文字起こしが欲しいと思う気持ちがある。技術の進歩も感じており、いろいろな場所で設置が進むことを期待している。

〔坊農真弓氏〕

難聴の方が努力をして声を使っているという事実を、聞こえる側が理解することが大切と思う。文字起こしの選択肢など、もう一歩、選択できる環境を整備することが大切と思う。

（３）講演内容「誰もが安心して暮らせる社会を目指して

～ＹＹＳｙｓｔｅｍ の取り組み～」

次に、株式会社アイシンの保坂龍彦氏からは、株式会社アイシンが開発した音声認識アプリ「ＹＹシステム」の誕生の背景と、現在の広がりについて報告を受けた。

アイシンは自動車部品メーカーであり、社内には約 300 人の聴覚障害のある従業員が主に工場等で働いている。コロナ禍でマスク着用が徹底された結果、口元を頼りにしていたコミュニケーションが成立しなくなるという大きな課題が生じたことが、ＹＹシステム開発のきっかけだった。

この課題を解決するため、社内開発として生まれたのがＹＹシステムであり、騒音の激しい工場環境で２年半にわたりブラッシュアップされたことから、認識精度とリアルタイム性に優れたリアルタイム文字起こしシステムとなった。当初は外部提供を想定していなかったが、山口県阿武町の役場窓口での利用をきっかけに社会実装が進み、現在では自治体、企業、交通機関、国際スポーツ大会など幅広く導入されている。

ＹＹシステムの特徴は、「当事者目線」を最優先にしている点であり、当事者に無料で提供し、意見を開発に反映させる共創の仕組みが高く評価され、国内外の賞を受賞しているという説明があった。

技術だけでは社会は変わらないので、ひとりひとりが声を上げ、実際に使うことで世界に字幕を添えていきたいと、今後も誰もがコミュニケーションを諦めない社会を目指していくとの意気込みが示された。

（４）主な意見交換

〔三神尊志委員〕

ＡＩ字幕も精度もよくできていると感じた。市政報告会等で活用させていただくにあたって容易にＡＩ字幕環境を整えることは可能か。

〔保坂龍彦氏〕

スマートフォンにアプリをダウンロードして、ＨＤＭＩケーブルを用いてモニターやプロジェクターに接続すれば、ＡＩ字幕環境を整えることが可能。

〔堀川友良委員〕

自治体からの要望によって生まれた機能や、現在取り組んでいることはあるか。

〔保坂龍彦氏〕

企業よりも自治体からの要望が多い印象がある。例えば言語については、当初４か国語に対応していたが、各自治体からの要望をいただき、現在では 31 か国語まで拡大している。また、部署によっては職員の業務時間の多くを占めている議事録作成の負担軽減として議事録機能も開発したところ、必要な時に使ってもらえるようになったと感じている。

〔鳥羽恵委員〕

本日は、手話通訳、要約筆記、ＹＹシステムによる文字起こしが揃っているが、当事者からすれば、ＹＹシステムのような文字起こしが世界に広がっていけば要約筆記はなくてもよいのか、それとも要約筆記ならではのものがあるのか。何か感じるものがあれば伺いたい。

〔保坂龍彦氏〕

ＹＹシステムは無機質な文字の羅列となってしまうので、手話や要約筆記と違い、表情や言い方の違いから思いを汲み取ってポイントとなるところを押さえるようなことはできない。感情や文脈を読み取ることは難しい。併用していくことが良いと思う。

〔傍聴者〕

当事者としてＹＹシステムを仕事の際も活用している。当事者として感じるのは、聞こえる人から聞こえない・聞こえにくい人に対する一方通行の部分もあるというところで、職場ではＹＹシステムのようなＡＩ文字起こしがあれば手話を覚えなくてもよいのではないか、という雰囲気が少し広まってしまった。発話をしない人にとっては答えを書く時間が必要になって、その時間を待ってくれないので話す機会そのものが減ってしまう。このような課題解決をどのように考えるか。

〔保坂龍彦氏〕

何が正解かという答えは見つからないが、ＹＹシステムは意思疎通を支援するコミュニケーションツールの１つであって、当事者が筆談が良いということであれば、筆談を使ってほしい。要約筆記や手話がいらないということは全くなく、コミュニケーションがとりやすい方法がそれぞれある。ご指摘のとおり、一方通行のコミュニケーションになりがちなため、双方向のコミュニケーションについては課題として感じているが、先が見えていないというのが本音である。

〔傍聴者〕

文字起こしアプリの普及の一方で、当事者にとって、自分の情報を自分が最も伝えやすい方法で伝えることができないということが起こっている。それが気づかれない、文字起こしアプリさえあればコミュニケーションの課題は解決するという誤解が広まるこ

とも当事者にとっては恐ろしい。

〔保坂龍彦氏〕

当事者からのメッセージ、強く受け止めさせていただきたい。

コミュニケーションは言葉のキャッチボールではなく気持ちのキャッチボールなので、お互いの気持ちを100%分かり合いましょうというのは無理だとは思うが、こういう世界があるということをお互いに知っていく、理解していくところから始まると思っている。

〔傍聴者〕

ＹＹシステムの表示について、文字を追う上で、文字のリズムや表示の際の上げ下げ等、目に負担がかかることもある。

〔保坂龍彦氏〕

リアルタイムで手動で用語の修正を行った部分はあったが、スピードや文字の上下に関して、利用者からの意見をたくさんもらって開発へフィードバックしていきたい。

〔坊農真弓氏〕

自身の研究室で日常的にＹＹシステムを利用しているが、聴覚障害のある学生の「声」がＹＹシステムでは拾えないので、その部分は通訳が必要。

ＹＹシステム等ですごくよくなっている世界がある一方で、声が出ない聴覚障害者の人たちの声を載せるために通訳者が絶対に必要というのが実際の運用かと感じている。

要約筆記についても、話のリズムや要点を言語学的にどう強調するか、そういったスキルを持っている方々だと思う。

最後に、鳥羽恵副委員長から挨拶があり、委員会は終了となる。